

哲學研究

第三百九十號

第三十三卷
第九三冊

教養と有用

——ゲーテの教育思想——

前田 博

ヘルダーリンの運命に關聯してキンデルバンクトは職業教育と一般教養との結合といふ「未だ全く原理的には決定せられてゐない問題」に説き及んでゐる。「あらゆる階級と個人とに共通な精神的基礎が得られる様になるには職業教育とどれだけの一般教養とが結合したならば」よいのであるか。……近代的生活に於いては政治家と百姓、詩人と思想家、商人・職人・役人、要するに單なる職業人は存在するが然し一個の人間を探し求めてもそれは無駄である。一般的文化の全内容をその教養に受け容れて生きた統一となすことは近代の個人にとつては不可能である。文化がかくも無限に分岐し、かくも多様となり、かくも矛盾にみちてゐるので、個人はそれを完全に自己の中に攝取することが出来ない。吾々は何れも社會生活の大なる活動の中で一定の點にはめ込まれてゐて、も早そこから他の活動とその精神内容との全範圍を達観し、それを自己の中に攝取することは出来ない。職業上の仕事のために全生活を通じて束縛せられて個人の精神は云はゞ制限された視野を見渡し得るに過ぎぬ限隠しをさせられてゐる。文化は個人の立脚地か

らは見渡し得られない位擴大した。ところでこの不可能はその中に大きな社會的危險を含んでゐる。個人の職業的活動が個別化すればするほど個人は他人の利害に對して益、疎遠となり無知となる。社會の各種類の職業、地位、階級はかくの如くして益、互に疎遠となり互に全く了解しない様になつてしまふであらう。あらゆる文化生活を支配すべき統一的聯關の意識は歩一歩失はれ、社會は内面的な連鎖を失はうとしてゐる。かくて近代の社會は益、分裂の姿となり、社會的秩序の力が愈、小さくならうとしてゐる。この秩序の最も確かな支へをなしてゐるのは實に諸個人に於ける文化意識の共通といふことであるから。

共通な、その意味に於ける眞に普遍的な教養が缺乏してゐるこの事よりも更に悪いのは吾々が代用物で自己を欺瞞してゐることである。近代の個人は他の範圍の教養の眞髓を深くまた特殊な點まで究め得ないために、すべてのものから云はゞ泡を掬ひとつて眞髓をそのままにして置く淺薄なデイレッツタンティスムスの助を借りてゐる。このデイレッツタンティスムスが普及することについて最も悪いことはそれが教育を支配することである。あらゆる學說が押し寄せて青年の精神はその何れについても何物かを費さねばならず、淺薄に自分のものによつてその何れからも何物かを得る。かくして以前に吾々の教養がもつてゐた調和と組織的聯關とは壞されてしまふ。

ところでデイレッツタンティスムスはゲーテの最も却けたものである。ゲーテは「一般人間的」教養理想の缺點と目される享樂的なもの、デイレッツタンのものに對して社會的な嚴格さを以て臨んだ。ゲーテはこの危險を専門家による狹隘化と貧困化の危險よりも更に脅威的であると觀たのである。それ故に彼は『遍歴時代』の一代辯者をして、「君たちの一般教養とをのための一切の設備はたわけごとである」といふはげしい言葉を投げつけさせ、横ひろがり人間に對して、一つにつき抜けることによつて自ら一切に通じ、一つを中核として積み上げられる教養をすゝめたのである。

かくてこの問題の解決の緒をキルデルバンツトはゲーテに於いて見出さうとした。「誠に、近代的個人は諦める個人

である。我々はみな『遍歴時代』の『謫念の人々』である。⁽¹⁾』では一體『遍歴時代』の人間の類型、教養の類型は如何なる特色をもつのであるか。

(I) Windelband: Über Friedrich Hölderlin und sein Geschick.

II

「私は民衆とその教養とに全生涯をささげて来た。」ゲーテは或る日(一八二五年四月二十七日)の對話に於いてエツケルマンにかう語つてゐる。ワイマルの民衆劇場についてのツエルテルの手紙がその日の對話の緒であつたのであつて、民衆の教養そのものについてはこゝには語られてゐるのではない。然し「民衆の友」として「民衆の教養に全生涯をささげて来た」とゲーテをして云はしめた背後に民衆と教養とが直接には結びつかない世界があり、教養が民衆のものでない教養觀が豫想せられる。『キルヘルム・マイスターの徒弟時代』に於いてキルヘルムはエルナーに宛てた手紙の中にかう書いてゐる。——「外國ではどうなつてゐるか僕は知らない。然しドイツでは貴族だけに或る程度の一般的な、云ひ得べくんば人格の完成が可能である。市民は功績を立てることが出来る。又高々自分の精神を仕上げることも出来る。然し彼の人格はどういふ所に身を置いて居ようとも失はれてしまふのだ……貴族は振舞ひ影響を興へるべきもので、市民は仕事をし生産するものである。市民は役立ち有用になるために個々の技術を磨き上げなくてはならない。さうして彼の本質の中には如何なる調和もないといふこと、又あつてはならないといふことは既に豫定されてゐる。といふのは彼は自分をある一つのことと役に立つ人間になるためには外の一切のことを疎にしなければならぬからである。この區別を將來した罪は例へば貴族の階上でも市民の屈從でもなく、社會自身の制度にある。」(L. V-3, 288-289)⁽¹⁾ 民衆の教養、市民の教養の第一條件は有用といふことであり社會に於ける特定の職業生活に必要な技術を磨き一つのことと堪能になるといふことでなければならぬ。然しこのことは必然に人間を一面的

にし、個性の調和的發展は望み難く、職人としての専門的知識技能は訓練し得ても人間としての人格の完成は期し難いと考へられて来た。それではゲーテは人格と有用といふ教育上の對立をどの様に考へて行つたのであるか。

右に引用したキルヘルムの手紙には「この區別を將來した罪は例へば貴族の僭上でもなければ市民の屈從でもなく、社會自身の制度にある」と述べてゐる。然し老年期のゲーテが自ら述べてゐる様に「制度の攻撃に熱中する」のは彼の「流儀ではなかつた。」さういふことは彼にはいつも「不遜」なことだと思はれた。「反革命的な改良主義の見解」に立つゲーテはその「未來を期待させる様な改良」の方向と方法を、倫理的共同體としての勞働の共同體の確立とそれにふさはしき市民の教育とに求めようとするのである。

ゲーテはラードブルッフが區別した意味に於ける「個人主義的立場即ち社會を個人に奉仕せしめる立場」にも立つてゐないし、又「個人を奉仕する成員として全體に編入する超個人主義的保守主義的國家哲學の立場」に立つてゐるでもない。ゲーテにとつては個人であれ團體であれとにかく社會生活の目標は人ではなくて勞働、仕事或はそれ等の究極目標たる「文化」であつたのである。ゲーテにとつて仕事こそ人生の主要目的であり、その仕事をなし得る堪能こそ教養の究極目標であつた。かゝる關聯に於いて一般に『キルヘルム・マイスターの遍歴時代』に於いて「ゲーテは職業的陶冶の最も有力な支持者となつた」と云はれるのであるが、然しこれだけでは『遍歴時代』の教育の問題の重點を正しく捉へてゐるといふことは出来ない。――

たしかに『徒弟時代』に於ける多面的な一般教養としての人間の形成、人格の確立に對比して『遍歴時代』は「一面性の時代」に即應する専門家、職業人の形成を強調してゐることは否定できない。『徒弟時代』に於いてはキルヘルムといふ一個の人間の教養の道程が語られ、そこには美しい人間の本性がその内面的素質と外部の關係との共同作用によつて漸次に形づくられて行く有様が書かれてゐる。そしてその自己完成の目標は「すべて」と「調和」とであつた。そしてこれは「われらは『何ものか』であつてはならない、『一切者』たらんと欲しなければならぬ」と（一

七七〇年八月二十四日ヘツレル(弟)宛に)書き記した若きゲーテ自身の姿に外ならない。職業に於ける成業(Maistorschul¹⁾)ではなくて「普遍的調和的な教養」を目指す普遍的な人間としての成業、人間としてのマイスターの境界を目指すキルヘルムの理想主義はかくて「有用」を尙ぶ彼の父の立場と相容れない²⁾。漠然たる一般的な教養を逐つて確かな職もなく確乎たる目的もない人間、それが『徒弟時代』のキルヘルムなのである。³⁾キルヘルムの求めるものは一般である。人生の一定なものではなくて概して人生そのものである。特殊なものや或る職務を求めて努力するのではなくて全體を、人間としての全般の教養を求めてゐる。彼が市民的職務を輕蔑するのは市民生活にあつては常に人間の全體としての價值が問題ではなくて、單に能力とか知識とか財産とかの一面が重んぜられるからである。キルヘルムの欲してゐるものは人間のもつてゐる「あらゆるもの」を残る隈なく發達せしめることである。そしてそこに至つて人は始めて「調和」を得ると豫感してゐるのである。キルヘルムがゾルナーに宛てた前掲の手紙に、「一言にして云へば全くあるが儘の私自身をつくり上げること、それが臆氣ながらも幼い時からの私の願でもあり目的でもあつた。今でも私はその通りのことを考へてゐる。たゞそれをどうして可能ならしめるかの手段が幾らか明瞭になつて來たのみだ。……私は自分の本性の調和ある完成に向つて拒み難い欲求をもつてゐる。……」(L. V. 3. 288, 290.)と云つてゐる様に『徒弟時代』に於いては自然的素質及び能力の調和的發展による一般的にして多面的な教養を目指し、明かに新人文主義の基調に立つてゐる。然し同時にこの小説に於いて思想的に最も吾々の注意を喚起する點は、主人公が審美的生活から漸く實行の世界に移つて行くことであり、無限と全體とを自己の中に求めた眼を轉じて自己の局限と有限とを認識し、その有限で足らないものをもつてゐる個體が共同によつて相補足して完全な全體を構成しようといふ方向に向つたことである。人の爲すべきことは多様であるが一人ですべてをすることは出来ない。それは多くの人の共同によつて爲されるのでなければならぬ。「大抵の人間は、最も卓越した人間でも、すべて局限されてゐる。」(L. VIII-5, 531.)一人がすべてを爲すのではなくて個人の一面性が集つて社會の全體を構成する。

「あらゆる人間を綜合してのみ人類はあり、あらゆる活力を綜合してのみ世界は存在する。」(ibid. 53e) 社會に於いて有用なる活動的専門家——それが「キルムヘルム・マイスター」に於いて次第に具體的に教育の課題として描き出されて來た人間の像である。

「すべて」に通曉し「すべて」に於ける多面的な、而も「調和」的な教養を得ることが『徒弟時代』のキルムヘルムの人生の目標であつた。然し「すべて」を求むるとき人は却つて何もかも得ることが出來ない。「自分の全人間性の中の一切のもの、あらゆるものを活動させ若しくは享受しようとするものは永久に滿されることがない努力だけで自分の一生を空費してしまふにちがふなす。」(L. VIII, 53D) 「人間は彼の無制限な努力に自分で一定の制限を與へるまでは幸福であり得ない」ことをキルムヘルムは悟らしめられる。『自然と藝術』にうたつてゐる如く、「制限の裡にこそ初めてマイスターは現はれる。」「すべて」への野望を捨て、「一つ」に徹することこそ眞の生き方であり、マイスターの境涯に達するみちである。「自己の本質の限界を打破し自己を『すべて』に擴大しようとする、かの熱望、すべてを知りすべてを悦樂しすべてを自らの中に嚙下せんとするこの熱望から慮えること——これゲーテが最も透徹して説いた人生の智慧である。」人間の本分はたゞ職業に於いてのみ求められる。現實的世界を知つてこの中に於いて彼の位置を、仕事と有用な活動とによつて探究しなければならぬ。この様にして『遍歴時代』に於いてはも早個人は調和的に發達することを教養の理想とするのではなくて、社會に對して最も有用になり得る如き技倆を完成することを理想とする。「美的な理想は實踐的な理想とはかり」「危げなディレッタントの本性から健全な堪能(有用性)への成長」が教養の中核を形成する。「親想的人間」から「一定の、社會的職業的共同體の中ではたらく行爲的人間」への生活理想の變轉に應じて、『徒弟時代』に於いては新人文主義の理念に基づく一般的教養が求められたのに對して、『遍歴時代』に於いては「子弟を具體的な一定の職業圈へ編入すること」が教育の課題であり、かくて一般教養よりも職業陶冶が教育の中心的任務となる——その様に解せられて來たのである。

- (1) Wilhelm Meisters Lehrjahre Buch V. Kapitel 3. S. 288-289. (Meyers Klassiker = Ausgaben. Goethes Werke, Festausgabe Bd. II.)
- (2) Gustav Radbruch: Wilhelm Meisters sozial-politische Sendung. Logos. Bd. VIII S.-159.
- (3) Rudolf Lehmann: Die Deutsche Klassiker. Holder-Schiller-Goethe 1921. S. 330.
- (4) Bilschowsky: Goethe, sein Leben und seine Werke, 1908. S. 132, 135.
- (5) *ibid.* S. 153, 518.
- (6) Windelband: Aus Goethes Philosophie.
- (7) Frischeisen-Köhler: Bildung und Weltanschauung 1921. S. 143.
- (8) Leser: Goethe (Pädagogisches Lexikon)

III

勿論ゲーテは職業陶冶といふ語を用いた譯ではなし。「遍歴時代」に於いてゲーテが用いてゐる語は「多面的教養」(vielseitige Bildung) (W. I-4, 67) 及び「一般的教養」(allgemeine Bildung) (W. II-11, 292) といふものである。そして「多面的教養」に對する言葉としてはその同じ箇所「一面的なるもの」(der Einseitige) といふ語がある。「一面的なるもの」とは云ふまでもなく多面的にはなく一面的に形成し陶冶された人間であり、一面的教養の人間である。「遍歴時代」第一巻には多面的教養をおつおつと辯護してゐるキルヘルムに對してモンターンが自信を以て一面的教養を主張してゐる一節がある。——「けれども世間では多面的教養が有利でもあり必要でもあると考へて來たよ」——「その時代にはさうだらうよ。多面性は本來たゞその中で一面的なものが働き得るエレメントを準備するだけのものだ。今は後者にとつて十分の餘地が與へられてゐる。さうだ、現在は一面性の時代だ。自分のために又他人のため、この意味に於いて働くことを解するものは幸なるかな。或る事柄の場合にはこれは徹底的に而も即時に自明だ。

汝を優良なる提琴家として訓練せよ。さうして樂長が好意を以てオーケストラに於ける汝の位置を指定するであらうことを信じてゐるがよい。汝の身を一つの機關とせよ。さうして人類が一般生活に於いて善意を以て汝に如何なる地位を授けるであらうかを待て。もうよそうぢやないか。それを信じたくないものは自分の道を行くがよい。時にはそれも亦成功する。けれど僕は云ふ——上に向ひつゝ下から奉仕すること、これこそ到るところ必要だ、と。自分を手の業に局限すること、これが最善だ。平凡極まる頭にとつてもそれは間違ひなく一つの手の業となる。それ以上のものにとつては一つの藝術となる。さうして最良のものは彼の一つをすることによつて一切をするのだ。若しくはもつと逆説めかずに云へば、彼が正しくやつた一つの事の中に、正しくやられた一切のものゝ譬喩を彼は見るのだ。〔W. I-4, 67〕——

そこでは個人的全面性といふ理想は捨てられて、一面性の時代が告示される。現在は一面的の時代である。教養を一方面に局限することは現代の要求するところである。なるほどそこには多面的教養が有利でもあり必要でもあると考へられた時代があつた。その時代にはさうでもあつたであらう。然し多面性は本來たゞその中で一面的なるものが働き得るエレメントを準備するだけのものである。今はその準備が十分に出来上つてゐる。自然のまゝの無制限な、むしろ放埒な活動欲が諦念によつて制限を加へられ、一切の性能の調和的發展が一つの方向へと諦念によつて集中せられ統合せられなければならぬ。諦念はもとより消極的な制限ではななくて積極的な集中を意味しなければならぬ。社會のうちに於ける自己の分を自覺し、社會のうちに於ける自己の位置を知つて、己れの存在、己れの爲すところが客觀的な意義をもち得る様に放逸を抑へることではなければならぬ。退嬰的無爲のあきらめではなくて道を成ずるための不放逸でなければならぬ。「活動することが人間の第一の使命である」(L. VI, 405)からである。而も共同によめて相補足しつゝ完全な全體を構成するために「自分のために、又他人のために」自らを局限し集中してその一面その一隅から「働く」ことが人間の使命であるからである。そのために己れの個性、能力の認識と一つの事物へ

の堪能を身につけなければならぬ。「上に向ひつゝ下から奉仕すること、これこそ到るところ必要である。自分を一つの手の業に局限すること、これが最善である。」この様にして教育は古いタイプの貴族の多面的な教養を興へることではなくて、個々の人間の素質に適應した職業に早くから向けてその能力を訓練し、その訓練された能力が彼にあらゆる場合に有用性を興へる様にするものでなければならぬ。「すべて」への野望をすて、厳しく「一つ」に自らを制限し集中することによつて人間は役立つことが出来るのである。一事一業に徹した専門家によつてのみ全き世界は建設せられる。十九世紀は「勞働の世紀」であり、『遍歴時代』は云はゞ「勞働の頌歌」である。勞働する人間は合目的に行動する人間であり、かゝる行動によつてのみ吾々は人生に席を占めるのである。有用なる仕事と力強い行動とは新しい時代の第一條件である。職業的堪能を習得すること、これによつて始めて人は有用を體現することが出来る。然し凡そ有用とは眞實には何であるか。

有用はそれ自體が獨立に有意義なるのではなくて、「有意義なるもの」たるの一部分に過ぎないのである」(W. I. 60)。キルヘルムが遍歴に於いて叔父の莊園に發見する「有用から眞を通して美」(W. I. 6, 93)の生活は彼が、過去のゲーテが、刻苦して歩んで來た道とは凡そ正反對である。然しゲーテは今有用の必要を痛感する。然しそれはあくまで客觀的な意義をもつて來なければならぬ。單なる有用を越えた人間の教養が關心でありすべてであつたゲーテをして今有用を問題としないでは居れない様にさせたのは時代の新しい社會生活であつた。專制政治と封建的社會との没落。經濟的動搖。——資本主義經濟が大陸を支配し始め、個人の有用性を要求した。ゲーテは機械の社會的意味を早くも認識した一人であつた。機械と蒸氣とによる産業革命によつてもたらされる危機が、かくて『遍歴時代』にも反映しないでは居なかつたのであるが、然しゲーテは機械の惹起する損傷のみならず機械がもたらす新しい活動力をも見てゐる。來るべき世代が産業の旗印の下に立つてあらうことを誰よりもゲーテが明瞭に知つてゐた。ゲーテの巨大な知性、あらゆるものを擲んで組織して詩的に溶解して行くこの悟性は、決して過去や現在の概観だけに力め

てゐるのではなくて、來るべきものを豫知し先取すること即ち未來感情に於いても同じ様に大膽なものであつた。彼は經濟と技術の世紀である十九世紀をこの世紀自體の限界を越えて理解し豫言的に告知したのであつた。⁽⁸⁾『遍歴時代』は既に來るべき工業と機械の時代の精神を呼吸してゐる。即ちゲーテは『遍歴時代』に於いて豫め配慮する教育者として新しい世紀の經濟的社會的發展の全體を見越し豫見的に告知してゐるのである。⁽⁹⁾かくて時代の要求する「分業的社會への適應」と「個人の全面的な育成」といふ教育上の對立を如何に解決するかといふ切實な問題がゲーテを捉へたのである。

ディレツタントを何人寄せ集めても全き人生は生まれないと同時に單なる一事一業の専門的職人の集合のみによつても全き世界は建設せられない。「一つをすることによつて一切をし」、「正しくやられた一つの事の中に正しくやられた一切のもの」譬喩を見る」ためには人間は一つが一切を含み一切を意味する様に爲し得る高き意味に於ける専門家でなければならぬ。一業に於いて神に通ひ一隅を照らすことによつて却つて全體を擔ふことの出來る人間であるのでなければならぬ。この様にして「役立つ」こと、「人柄の完成」、有用と人格的教養とを如何に兩立せしめるか、分業的社會へ有效に適應して有用にはたらき得る職業人を育成することが而も同時に人間としての完全な教養を全うし得る様にするには如何にすればよいか、その様な立場で職業教育と一般教養とが如何なる關聯をもつか。これが『遍歴時代』の、そしてゲーテの、教育の問題の重點なのである。「専門化され特殊化された教育」の要求——こゝに『遍歴時代』の本質的な内容を求めるのは誤である。むしろゲーテの問題は、如何にして専門的に仕上げられた職業人が同時に高き意味に於いて人間であり得るか、といふことであつたのである。「早くから職業教育をすること」を推奨し職業陶冶を教育の中心任務としたことに『遍歴時代』の意義が存するのではない。なるほどゲーテは機械・工業の日毎に旺んになつて行く社會に於いてその眼下に起る變化、而も觀想的精神よりも技術家と専門家をより以上に要求するところのこの變化を早くも見てとつて「一面性の時代」、職業陶冶の時代の來たことを告げたとも考へら

れるのであるが、それだけのことであれば現代の吾々にとつては無意義である。單に多面的な一般教養ではなくて、一つの職業的基能へ特殊化し集中されることなしには教育が具體的であることが出来ないといふことは自明の理である。特殊化し一面化することの必要がではなくして、かくして形成せらるべき「一面的なる人間」がそれにも拘らず如何にして一面化によつて害はれることなく「人間」たり得るかといふことが問題であり、そしてこれこそ吾々がそこからゲーテを回顧しようとする觀點なのである。ゲーテ教育學の究極の問題は、嚴格に社會に役立つ様に教育せらるべき青年が如何にして自らのうちになほ完全な人間性の理想を實現し得るか、といふことであり、「職業人の人間性の問題」こそ『遍歴時代』の重點である。『遍歴時代』は「専門的になつた職業人をすべての人間的なるものへ解放する」教育の必要と方法とを中心とするといふことが出来る。

發達によつて分業が進むにつれ、愈々益々専門化によらなくては有用な仕事は完成しない。かくて宣傳的な強調と誇張とを以て一面性、専門化、手工業、行動を讚美することによつて、限定、實力行、手工業の尊重などが缺如するために生ずべき種々の危険をゲーテは『遍歴時代』によつて豫防しようとしたのであると、ビルショウスキも述べてゐるが、『遍歴時代』の重點はそこにはないものである。『遍歴時代』の最も本質的なるものは、ゲーテが當時の、そしてまた次の時代の、更に現代の吾々の、最も困難な而も緊急な社會問題、教育問題に對して與へた深い洞察力であることと云はれるのであるが、然し「時代は分業を要求する、徹底せる専門家を必要とする——十九世紀の初頭に當つて逸早くこのことを看破し提唱」したことがゲーテの獨眼なのではない。機械工業は人間を機械の奴隸となし、人間を機械化する。この様な機械化の過程から人間を救ひ出し労働に魂を保證し働くものに人格價値を確立しなければならぬ。「機械に對する精神の支配」、機械の世界と魂との調和が回復せられなければならない。かくて分業による専門化が人間の機械化を來し、有用なる様械の一部分に墮落せしめる危険を豫見し警告して人間の解放を考察したところに『遍歴時代』の意義が存するのである。トオマス・マンは「ゲーテは徹頭徹尾教育的な人間であつた」と云つてゐる。

るが、『キルヘルム・マイスター』は自己形成的な衝動が客観化され、外部へ向へて行つて、社會的なもの、いや、政治家的なものへと進み、そして教育的なものになつて行く次第を示すもので、⁽¹⁸⁾社會的なものと教育的なものとは、而もそれらの内面的な聯關に於いて『遍歴時代』の根本要素をなしてゐたのであり、そこに於いて彼は社會改造の必然性を、而もその様な社會を構成する人間の教育のみちとの内的聯關に於いて「豫言的」に示さうとしたのである。⁽¹⁹⁾「新しい社會の制約の下に Humanität を保持し、むしろ Humanität によつて新社會を照らし高める」ために、およそ社會そのものが如何にあるべきか、そのための人間の教育が如何にあるべきかを、「豫言的に」「目のあたり描き出した未來の像」——それが『キルヘルム・マイスター』に外ならない。⁽²⁰⁾

* 思想上『遍歴時代』の内容に密接なつながりをもつ『マカーリエの文庫から』(一五五)に次の語がある。「今や世界はそれだけでなく我々に一般的教養 (allgemeine Ausbildung) を強制する。故に我々はその上これに向つて努力する需要がない。特殊を我々は自分のものとしなければならぬ。」(一八二九年三月)

(1) Wilhelm Meisters Wanderjahre, Buch I, Kapitel 4, S. 67. (Goethes Werke, Festausgabe Bd. 12.)

(2) Jonas Cohn: Die Pädagogik der Aufklärung und des deutschen Idealismus. (Handbuch der Pädagogik, hrsg. v. H. Nohl und L. Palmt. Bd. 1.) S. 299.

(3) Leser: Das Pädagogische Problem Bd. II, S. 549.

(4) Bielschowsky: op. cit. S. 561-562.

(5) Cohn: op. cit. S. 298, 299.

(6) Bielschowsky: op. cit. S. 538, 546, 564.

(7) Thomas Mann: Phantasie über Goethe. 佐藤基一譯。

(8) Leser: op. cit. S. 531.

(9) Thomas Mann: Goethe als Repräsentant des bürgerlichen Zeitalters. 佐藤基一譯。

- (10) Auriant: Goethe et l'éducation.
- (11) Frischsen-Köhler: op. cit. S. 146.
- (12) Joms Cohn: Wilhelm Meisters Wanderjahre, ihr Sinn und ihre Bedeutung für die Gegenwart, Logos Bd. I, S. 236.
- (13) Cohn: Handbuch S. 209.
- (14) Bielschowsky: op. cit. S. 562, 565.
- (15) Watzel: Einleitung zur Meyerschen "Goethes Werke," Festsangabe Bd. 12, S. 38.
- (16) Leser: op. cit. S. 525.
- (17) Watzel: op. cit. S. 25.
- (18) Thomas Mann: Goethes Laufbahn als Schriftsteller, 佐藤莞一譯。
- (19) Rein: Goethe als Pädagog. S. 20.
- (20) Frischsen-Köhler: op. cit. S. 148.

四

ブランドスやレーマンは『遍歴時代』をプラトンの國家篇(ポリテイア)に比較してゐるが、たしかに「塔の結社」によつて實現を期待されてゐる社會がプラトンなどの夢みた理想國であつたことは疑を容れない。それは「或る程度の公共感覺をもち」従つて「社會感覺」(L. VIII-7, 523)をもつたものが、自分の十分に展開された素質、磨き上げられた天賦をもつて夫々の位置、各々の持場に於いてその得手得手によつて相倚り相輔けて全人類的な社會をつくり上げようとする働く人間の共同體である。『徒弟時代』に於いてキルヘルムを背後から操つてゐる「塔の結社」の意義を更に明瞭に浮き出さしめるべきであるといふシラーの要求に應へて『遍歴時代』に於いては「塔の結社」は世界結社 Weltbund

にまで擴張發展せしめられることによつて全篇を貫く經となつてゐる。この結社は定住民も移住民もすべてを一括して一つの大きな勞働の共同體たらしめんとする。この結社の組織や目的などの語られる部分は『遍歴時代』の云はゞやまであり、この時に指導者の一人レナルドの行ふ演説 (W. III-9) はゲーテが『遍歴時代』に於いて云はんとする究極にして最深なるものを物語つてゐる。レナルドは云ふ、「今吾々は一つの世界結社に着手してゐると自認することが出来る。着想は單純に偉大である。實現は悟性と力によつて容易である。……人間が何に手を出し何を扱はうとも個人だけでは十分ではない。社會こそ人間にとつていつでも最上の欲求である。有用の人間はすべて、恰も建築主が建築家を、建築家が左官と土工とを求める様な相互關係を保たねばならない」(W. III-9, 366)。個人を全體に結びつけるものは共通の目的であり、個人の價値を高からしめるものはこの共通の目的に向つての勞働に參與することであり、活動と仕事とである。その様な勞働の共同體としての世界結社は然し(オドアルトの言葉を借りて云へば)「世紀が吾々を助けてくれなくてはならない、時が理性に代らなくてはならない」(W. III-12, 384) ところの「未來のプログラム」であり、イデーである。その様なユートピアを企劃せしめた動機は歴史的社會的な事態の大きな變化である。既に『徒弟時代』の終りに、切迫してゐる大きな變化を告知してゐる。フランス革命、新世界の出現、技術と機械の時代の前ぶれ、すべては古き世界が亡び社會の安定が失はれ行くことを吾々に教へる。「世界の大勢に關する知識をほんの少しでも持つて居さへすれば、現在吾々の目の前に大變革が起らうとしてゐることが、財産は殆ど全然と云つてよい位安全ではなくなつてゐるといふことが分つてゐる筈だと思ふ。……今日では一つの場所に所有して居り、一つの箇所に自分の金を託して置くといふことは決して安心なことではない、といふことになつてゐる。」「塔の結社」はこの様に世界情勢が動搖する結果、人の所有權にこの先どの様な變化が起るかも知れないことを察して、或るものはロシヤへ、或るものはアメリカへ渡り(ヤルノーの言葉を借りて云へば)「國家革命が甲なり乙なりの財産を掠奪してしまふ唯一の場合を考へて、お互同志の存在を保證しよう」(L. VIII-7) といふ目的をもつて

ゐるのである。その様な脚下の地盤の搖ぎが新しい社會秩序を展望せしめたのである。そしてその様な「社會生活及び勞働の新秩序」といふ新しき社會の設計に即して新しき人間をつくるといふ「新教育の設計圖」——それが「教育州」(Pädagogische Provinz)に外ならない。倫理的な勞働の共同體を究極の理想として目指しつつ、而も現實のこの變轉極まりなき變動期の社會生活を切り抜けて行く新しい人間が形成せられなければならない。教育こそ新しい社會の條件である。新しい社會、新しい國家は新しい人間を必要とする。ゲーテが大臣として職を奉じて痛切に感じたことは新しい人間なしには改革が、沉んや新しい制度がいかに實行困難であるか、といふことであつた。この新しい人間の必要をゲーテは或る日(一七八〇年九月二十一日)の書簡に於いてシュタイン夫人に宛てて訴へてゐるのであるが、かういふ新しい人間は新しい教育によつて生まれるのである。

カライルはゲーテに關する論文の中で、『遍歴時代』は十九世紀の譬喩であり、「現代(十九世紀)の人間が進むべき目標」を具體的に描いてゐると云つてゐる。またキンデルバンントケキルヘルム・マイスターは「十八世紀から十九世紀へと進み行く人間の類型」であると云つてゐる。ではゲーテが『遍歴時代』に於いて描き出さうとした變動期の「新しき人間」の類型とは如何なるものであるか。それは『遍歴時代』といふゲーテの作品そのもの、中心的な意味と内的必然的な聯關をもつてゐる筈である。それではこの『遍歴時代』の中心的な意味とは何であるか。

『遍歴時代』の統一の意味を解釋し明かにするといふことは、實はこの作品が一つの統一をもつてゐるといふことを豫想する。ところが『遍歴時代』には脈絡、聯關が缺けてゐるといふことが一般に云はれる。多くの讀者はこの作品に於いて諸部分がたゞ外的に結合され編集されてゐるといふ印象を受けるであらう。従つてこの作品から統一的な全體を期待することは困難である様に見える。ゲーテ自身の作品が一つの「寄せ集め」(Aggregat, Komplex, Kollktivum)であるとも云つてゐることはその成立の歴史を見ても諾かれることで、そこに所謂『遍歴時代』の混亂があるのである。然し或る日(一八二一年九月七日)のツアウペル宛の手紙にゲーテはかう云つてゐる。——「脈

絡、目標、目的は作そのものの中に存するのです。よしや一つの作から成つて居ずとも一つの意味から *aus einem* 成つてゐます。而して數多の異種類の外的事件を調和的のものとして感情に供すること、これがその任務であつたのです。他の場所にもゲーテはこの「一つの意味から」といふ様な表現を用ひてゐるのであつて、長い歳月を閲したこの書物の成立過程は云はゞこの「一つの意味」を中心とする様な素材の結晶の過程であり、この書物はその様な意味に於ける結晶體にたとへることが出来る。ではこの「結晶の中心」としての「一つの意味」とは何であるか。

『遍歴時代』はその成立史を見ても、また出來上つた現在の姿に於いて見ても、決して普通の意味での首尾一貫した物語ではない。或る日（一八二九年十一月二十三日）ロホリツツに、「この書物は丁度人生そのものの様です。全體の複合の中には必然的なものと偶然的なもの、決定されたものと未決定なもの、或は成功し或は無益となつて存在します。それによつてこの書は悟性や理性の言葉には到底包含せられない一種の無限を含んでゐます」と云つてゐる様に、云はゞ人生の諸相をうつし出してそれについての知慧を讀者に媒介してゐるかの様でもある。このことはあたかもキルヘルムの遍歴に關聯する。——人生の徒弟時代を卒業したキルヘルムは廣く人生を遍歴して人生の諸相を見學して來なければ本當にマイスターの境涯には到れないのである。今やキルヘルムの使命は種々の人生を見學するにある。而も種々な人生は相互の間に微妙な關聯をもちつゝキルヘルムの學びとるべき一つの人生を教へてゐるのである。——この様にも考へられる。然し『遍歴時代』は單に人生が如何なるものであるかを示すものではない。人生が如何なるものであるかに即して自ら人生を如何にすべきかが問題とされてゐるのである。様な相をもつ一つの人生を自ら遍歴する人間は第三者として傍觀的に見學してまはるものとはちがつて遍歴の能力、遍歴の資格 *Wanderfähigkeit* をもつてゐなければならぬ。人間が成熟するといふこと、従つて人間が教育されるといふことは固定した状態へ編入されることではない。その様な固定した状態はもはや實在しないのである。人間は今や變り行く世界に

適應しなければならぬ。遍歴の能力をもたなければならぬ。人生を遍歴することの出来る人間、「遍歴資格をもつ人間の類型 *der wanderfähige Mensch*」そこにこの複雑な姿をもつた作品の「一つの意味」がある。そして變轉極まりなき社會状態に對して如何に對處すべきか、この人生を如何にすべきかを會得した人こそ「遍歴資格をもつ人間」といふゲーテの新しい人間類型なのである。かくてこの作品は云はゞ多くの短篇小説の「アラベスクの花輪」であるが、而もその構圖は決してたためてはなくて一つのテーマの豊かにして多様な variations から織り成されてゐる。遍歴こそ見えかくれしつゝ作品を貫くこの主題であり、「思想の中核」なのである。一般に『遍歴時代』を貫く二大根本思想は勞働と諦念である⁽³⁾と云はれてゐるのであるが、勞働と諦念は遍歴資格の要素としてこれに含まれてゐるのである。

然し一つの誤解に對して吾々は警戒しなければならぬ。それは人生の遍歴者とは人生の「渡り鳥」(Zugvogel)ではないといふことである。キルヘルムは『徒弟時代』の終りに於いて既に「彼はもはや渡り鳥の様には世界を眺めなく」(L. VIII, 485) の様な境涯に至つてゐる。人生の渡り鳥とは瞬間から瞬間へ生きるものである。キルヘルムは今や瞬間を超えて「數世代にわたる持続性」に想ひをはせ、自己の行爲と永遠とを結びつけるに至る。而も「瞬間」を離れて永遠を求め、「こゝ」を離れて無限を追求するのではなくて、「今こゝ」に自我を傾倒し今こゝの生を生の斷片とするのではなくて、今こゝの生を永遠無限の生の象徴とし、永遠無限を今こゝにあらはれしめようとす。遍歴者はその義務の一つとして「一緒に逢つても過去のこともまた將來のことも語つてはならぬ、唯現在のことのみ彼等は問題とすべきである」(W. I, 68)。然し遍歴者は文字通り瞬間から瞬間へ、過去を語らず未來を考へないで移り行くのではなくて現在の中に過去と未來との結晶する永遠の生を見、且つ表現しようとするのである。

では遍歴の能力、遍歴の資格とは具體的には如何なるものであるか。遍歴するものは、凡そ外的生活には固定性がなく變轉極まりなきものであるから、到るところで如何なる社會状態に於いても自活することが出来、到るところで

その境遇環境に應じて他に役立つことが出来るのでなければならぬ。そのためには一定の職業に堪能なることが先づ以て必要な條件である。然しそのことの故にまた第二に、遍歴するものは外的生活條件の極まりなき變轉に己れを失はず、外に失つた固定性を内己れ自らに求めなければならぬ。古い土着的な秩序の瓦解にも拘らず、いたるところに故郷を建設する力を自らの中に樹立するのでなければならぬ。遍歴するものは「眞に確立してゐるものは何であり、うつり行くものは何であるか」(W. III-1, 300)の認識をもつてゐなければならぬ。レナルドの訓辭はこの點を明かにする。領土を遣はれて自分の手の働きて自分を養つて行けない諸侯よりも労働者の方が遙かに幸福である。數千年來この方、人民の福祉の源泉と見なされて來た土地の所有よりも労働が動産に於いて創り出すもの、方が價值的に遙かにすぐれてゐる。「若し人間の所有するものが偉大な價値をもつてゐるとすれば、人が行ひ爲すところのものに更に多くの價値を置かなければならぬ。……人はかく云ひかく繰返した。「若しよいところが故郷である」と。しかしこの慰藉的な諺は「役立つところが故郷である」と云つたならば一層表現の妙を得たことになるであらう。自家にあつては人は無用であつてもすぐには自立ちはしない。然し世間に出れば無用の徒は忽ちに知れ渡つてしまふ。「あらゆる人よ、到るところ自他にとつて役立つ様に努めよ。」——私はかく云ふ。これは教訓でもなく忠告でもありません。それは生そのものの宣言であります」(W. III-9, 362)。遍歴に於いてはこの様にして互に助け合ふことの外に最も大切なことは各人が外的生活の條件が失つた固定性を自己自身の裡に求めるべきことである。人間は外的な諸事情や諸條件が變動しないで永續すると考へることをやめなければならぬ。いつでも急變した境遇に置かれる覺悟をもつてゐなければならぬ。「人間は、持續的な外部關係をぬきにして自己を考へることを學べ。一貫を環境に求めず、ただ己れ自らの中に求めよ。そこにこそ彼はこれを見出し愛を以て養ひ育てるであらう。到るところ家にあるが如く感ずる様に、彼は自らつくり上げ自ら整へるであらう」(W. III-9, 366)。「一貫を環境に求めず己れ自らのうちに求めよ。」これが遍歴團長の訓辭であり遍歴するものゝ心構へでなければならなかつた。遍歴の能力あるも

のは従つて自己自身のうちに固定性をもつものでなければならぬ。身を雲水遍歴の境涯に置くといふことは自主性を没した受身的な適應順應を意味するのではなくて、隨處に主となる「一貫」の生活根據を己れ自らのうちに確立するのでなければならぬ。精神の可動性、順應性は主體の内面的固定性を缺くとき自主的な人間となることが出来るであらう。到るところに於いて自活し他人に役立つことの出来るものも、これを缺くときは、わざは人間を離れて單に經濟目的の有用な器械に墮するであらう。流轉の中に身を置いて而も流れざるものは内に確き信念をもたねばならぬ。興へられた世界の中に自らの世界を建設し創造する中心がなければならぬ。

(一) Lehmann: op. cit. S. 307.

(二) Cohn: Handbuch S. 299, Logos S. 233.

(三) Bielschowsky: op. cit. S. 518.

五

遍歴する能力をもつ遍歴資格者の第一の資格條件は従つて到るところで自活することが出来、到るところで他人の役に立つことが出来ることではなければならない。そのためには一定の職を習得してゐなければならぬ。「職業に堪能なること」が先づ以て必要である。既にキルヘルムの徒弟時代の終りに當つてヤルノーの次の言葉がある。元來徒弟時代の修業が了つて卒業免状を出すのは「自分達が生まれついたものを活々と感じ且つはつきり認識した人達、或る程度の樂しさと容易さとを以て自分の道を歩きつゞけられるだけの鍛錬の出来てゐる人達に限られてゐるのだ」(L. VIII-5, 529-530)。即ち徒弟時代の年季あけは従つてゲゼーレとして遍歴修業に出ることを許される條件は、己れの天職を自覺してその道の堪能を身につけたものでなければならぬのである。そのためには消極的には先づ放埒無制限な多方面への活動欲を局限し人力の限界を自覺して自己を集中しつゝ積極的に特定の點から天職 (Beruf) に

従つて、自己がそこから *partition* されてゐる上、全體に向つて働き奉仕して行くのでなければならぬ。「遍歴時代」の副題が一名「諦念の人々」である如く、遍歴者は諦念の人々でなければならぬ。諦念は限定と集中を意味する。

然し「自分を一つの手の業に局限すること」即ち教養の多面性を一方面的なるものに局限するといふことは如何なることであるか。一方面に自らを局限し集中するといふことは當然一方面に偏することではあり得ない。では局限される集中された一面の中に多面性は如何なる形で含まれて行くのであるか。「多面性は本來たゞその中で一面的なるものが働き得るエレメントを準備するだけのものである。」然しまさにそれ故に一面性が働き得る準備としては多面性が必要なのである。「人間はだれでも自然のまゝでは無制限な、むしろ放埒な活動欲をもつてゐる」といふことは人が凡ての方向に發展する可能性を素質として自らに具へもつてゐるといふことである。然し素質の多面性は可能性であり萌芽であつて現實態ではない。その限り云はゞ混沌であつて、その伸び行く、また伸び得る方向を現實に認識し難い。その限り可能態としての素質を一定の方面に局限することは不可能であると共に危険である。それは階級的に固定した社會に於いて職業が世襲であつた時代にのみあきらめなく行はれたことである。可能態としての素質は歴史的文化的社會に於ける經驗と交際を通して次第に諸方面が認識し得られる云はゞ多角形へと成長せしめられなければならない。 *allgemeine Bildung* は先づ以て普通教育といふ意味での基礎的一般陶冶として必要とせられる。一面性への局限が行はれる爲には準備としてエレメントとしてこの意味の多面性が必要なのである。然しそれは「本來たゞ……準備するだけのものなのである。」局限集中すべき一面が認識せられるためには單なる可能態としての、むしろ無方向、無角が次第に多少の凸凹を有する多角形に發展しなければならぬ。然しその多角形は正多角形ではなくて次第に一角の突出する多角形に自らを形成する。こゝで初めて、局限集中すべき一面が認識せられると共に職業陶冶が始められるのである。この様にして *allgemeine Bildung* はそれ自體が目的のではなくて、たゞ「奉仕する肢體」として教育に於けるその位置が認められる。新人文主義の意味に於ける人文的教養がすべてではなくて、それは曾て

の絶対支配的な位置を去つて教育といふより大なる全體の肢體となるのである。

然し *allgemeine Bildung* は單にその様に基礎的な一般陶冶として、段階的に區別せられて職業陶冶を「準備する」だけのものではないのである。*allgemeine Bildung* が教育の全部でないと同様に職業的陶冶が究極目的であり教育の全部であるのではない。『通歴時代』の「教育州」に一つのモデルを供したと云はれるフエレンベルクは、勞作を通じて自然の素質が教育せられなければならないと考へたのであるが、而も勞作は自己目的ではなくて目的に對する手段即ち子弟の能力を發達せしめるための手段であり、教育の目標は役に立つ職人をつくることではなくて教養の豊かな獨立的な若者をつくることであり、かくて職業陶冶は人間の教育 *allgemeinmenschliche Erziehung* に奉仕すべき役割と位置とを與へられた。ゲーテがフエレンベルクの思想を知つてゐたか否かには關係なく、この思想は『通歴時代』の教育思想につながる。⁽¹⁾ 一般陶冶から職業陶冶が生まれると共に、職業陶冶は一般陶冶から離れて行くのではなくて高次の一般陶冶を要求しこれへ還つて行くことによつて相互に交入し全體としての教育を内的分節をもつた具體的な現實態として完成して行くのである。

周知の如くレーマンは普遍性と全體性とを區別する。普遍性 *Universalität* とは人間文化の全領域、人生の諸現象の全領域にわたる興味と理解とのひろがりを意味するのに反して全體性 *Totalität* は「個人のあらゆる力と素質との統一ある完全な形成」である。普遍性の概念は容體の世界への關係によつてその内容を得るのであり普遍性は容體の世界へのひろがりであるのに對して、全體性は主體そのものに關係する。従つて全面性や多面性は直接に教養の核心にふれる問題ではないのである。然し「人間の重要な面」が完成せられない時には全體性即ち人格の全體性はその本質を喪失する。全體性はゲーテがその一例である様に特に豊かな天賦に恵まれた場合には普遍性としてあらはれるが、普遍的でなければ全體性を保持し得ないのではない。全體性は狭い範圍に於いても現はれる。従つて普遍性なき全體性といふことは考へ得ることでありそれ自身價値あるものであるが、全體性なき普遍性は人格の形成、教養にとつて

無價值である。かくて全體性は素質や傾向の差異と結びつくことができるし又結びつかねばならないのである。従つて個人はその獨自の價值を發展させることによつて全體性を喪失し離れるのではなくて却つてさうすることによつてこそ全體性に到達し得るのであり、かゝる全體性こそ同時にまた高き意味に於ける個性でもあるのである。全體性が個人のあるべき力と素質との統一ある完全な形成である限り、統一の中心となりすべてがそこへ統一される獨自なものがなければならぬからである。それが前に述べた多角形の突出する一角である。例へば『徒弟時代』のキルヘルムは無限なる可能性、云はゞ「すべて」にならうとする憧れをもつた「無」に外ならなかつた。然るに『遍歴時代』のキルヘルムはその様な「無」と「すべて」との間を動搖してゐる個體から一つの個性になり、無限定な可能性から限定せられた現實態になつたのである。かくして個體は個性的に規定せられた全體としての人格となるのである。

従つて人間の教育教養にとつて第一に必要なことは單なるディレクタントの域を越えることではなければならない。「君達の一般教養とそのため一切の設備はたわけごとである。一人の人間が或る事を斷然明確に理解すること、隣近所にゐる他人が滅多にやれぬ程、卓然として事を成すこと、この點が大切なのだ」(W. H. I., 29)。ヤルノーはかう云つてキルヘルムをいましめる。即ちどれも一通りは知つてゐる様であるが、さて何一つ専門家らしくやれないディレクタントが先づ以て却けられる。一つのものに對して全我を傾注するのではなくて多くの對象に對してどれにもこれにも向つて行くがどれも中途半端である様な、その様な興味の中に自己を放散するものがディレクタントである。然るに嚴格な専門的職業活動によつてディレクタントの限界を越えるのでなければ眞にマイスターの境涯へ高まることは不可能である。そのためには「一つの對象を全體的に占有し支配する」(W. I., 66) ことが必要である。『自然と藝術』にも「大業を欲するものは全力を傾注せざるべからず、制限のうちにこそ初めてマイスターは現はれる」とうたつてゐる。かくて「教育州」の教育に於いては「自分を一つの手の業に局限すること、これが最善だ」(W. I., 4)。「あらゆる生活に、あらゆる行動に、あらゆる技術に、手の業が先立つて來なければならぬ。それはたゞ制限

のうちにあつて獲得されるものなのである。一つのことを正しく知り、且つ實踐することは百のことを半端にやるよりも、もつと高い教養を興へるものである」(W. I-12, 169)と主張せられるのである。「私の唯一の氣遣は實際に彼の裡にあるものを育成し彼が學ぶすべてを彼に根本的に學ばせることである。吾々の一般に行はれてゐる教育は子供達を不必要にあまりにも多方面に追ひ立てる。そして吾々が大人達に見受ける多過ぎる程の方向にもかくの如き教育に責任がある。」アウグストを教育しつゝある頃の手紙にゲーテはかう書いてゐる。「廣く」多方面へのほすことは人間をまとまりなく遠心的に自己放散に終らしめるのであり、ものを「深く」根本的に學ばせることが人間をして求心的自己集中的自己統一的に自己を形成せしめるのである。

然しディレクタントの域を脱すると共に更に單なる職人的有用を趣えるのでなければならぬ。従つて勞作教育、職業教育は實は専門の技術を教へるのではなくて一つの専門的な作業によつて人間を教育するのでなければならぬ。「一つに専らなる作業」に即しつゝ而も例へば「動物を飼育したり仕付けたりするといふ、かういふ野性的な或る意味で粗暴な作業をさせながら、而も青年が自ら野性化して動物となることを防ぎ」(W. II-8, 258-259) 人生の實踐に即しつゝ人間そのものの涵養を目指すこと——これがゲーテの意味に於ける一面的教養である。かくて「教育州」に於ける勞作教育は事柄ザッパそのものゝもつ必然性に即した極めて嚴格な硬教育とならざるを得ない。子供たちは選んだ仕事の本質から生ずる入念な指導、嚴格な法則に従はなければならぬ。勞働するといふことは人間の恣意をみぢんも許さない。勞働に即して自らをゲーテの要求した即物的客觀性 *Sachlichkeit*, *Objektivität* へ高め得る如き勞働の仕方が要求されるのである。

「人間が仕遂げなければならぬものは第二の自己」として彼から分立する必要がある。若し第一の自己が全然それによつて貫かれて居なかつたらどうしてそれが出来るか」(W. I-4, 67)。手はその役目を果さなければならぬといすれば一つの独自の生命がこれに魂を吹き込まなければならぬ。手はそれ自身一つの自然であり、独自の思想、独自の

意志をもたなければならぬ。さうして手は雑多なやり方でこの使命を果すことは出来ないのである。此處に『遍歴時代』に於ける専門家の眞髓がある。全き人間は仕事によつて充たされてゐなくてはならないと共にまたその仕事を彼の人格で充たさなくてはならない。その仕事が「人格の表現」である様な全我を傾注する仕事の仕方にて始めて専門の作業によつて人間を教育するといふことが可能なのである。云ひ換へればその仕事に魂を入れ仕事に自己を貫くと共に仕事が「第二の自己」となるところまで深く仕事に沈潜することによつて手工業者の仕事も「人格の表現」となり得るのであり、仕事の中に十分に自己を生かし切ることによつて働きの人間がつくられて行くのである。「これは永遠に眞實なことだが」とゲーテは（一七七六年の）ある手紙に書いてゐる。「自己を制限すること即ち一つの對象を、少數の對象を、眞に欲求しそれ故にまた眞に愛しそれらに執着しそれらをあらゆる方面に向けそれらと一體になること、これが詩人を、藝術家を、——人間をつくるのである。」

凡そ精神のはたらきを各方面の活動に平均に向け調和的に形成するといふことは美的觀想的な状態に於いてのみ可能なのであり、一定の目標に向つての意志的實踐的行爲がなされるや否やその様な平均のとれた興味の多面性は消え失せる。ゲーテにとつて仕事こそ人生の主要價値でありその仕事をなし得る堪能こそ教養の究極目標であつた。ところで堪能を習得し仕事をなすためには制限が必要であり意志及び諸々の力の發展に或る特定の方向が要求される。然し既に見て來た様にかくの如き集中によつて人格の全體性は決して喪失もしなければ傷つけられることもない。仕事は全人格のあらはれであり、かくて仕事は人格と矛盾するものではなくまた一面性も全體性と矛盾するものではなく一體となるものである。一方面を中心として統一的に自己を形成することによつて人格の全體性が保持し得られるのであり、かくして眞に有用になることによつて人格に高まることが出来るのである。教養は單に役立つための手段ではない。それは職人的有用に過ぎない。然し單なる教養のための教養は否定せられる。ディレツタントの立場の超克がなければならぬ。教養は有用と矛盾しないばかりか有用を媒介として始めて具體的であり得る。人格は「徒弟

時代』のキルヘルムが考へた様に社會に於ける職業的活動から離れたものではなく又その様にして形成せられるものではなくて物及び人間に對する關係に於いて成立するものであり、人格を形成する教育は生活共同體、勞働の共同體への參與に於いてのみ保證せられるのである。社會に於いて有用になることは人格形成の必然的な條件である。そこにゲーテが教育を單なる「學習過程の直接の指導」を本質的なるものと考へる啓蒙主義の教育學を超えて、社會生活の中に於いて社會生活そのものに接觸し參與して行く途を通して有用な社會的人格を形成しようとした所以がある。學校は社會生活の縮圖となり、生活學校、社會的職業的に規定せられた作業學校とならねばならぬ、と考へられるに至つたのである。

* かくて『徒弟時代』に於ける僧院長の教育原理とナターリエのそれとの對立、即ち個性の自由な發展と法則による指導との對立は『遍歴時代』に於いて綜合される。ゲーテもすべての形成を有機的成長の類推に於いて見る傾向をもつてゐたために一方『徒弟時代』に於いてはルソーの影響の下に僧院長の教育觀として、素質の内からの自然的發展を重視してゐる。例へば、ゲーテは僧院長をしてかう語らしめてゐる。「教育は性向に順應しなければならぬ。どんなことでもそれに對する素質がなかつたら、それにまで刺戟する衝動がなくては、全然出来るものではない」(L. VIII-3, 502)。「人の教育に於いて幾分でも成功しようとするならば、その人間の性向と希望とが何れへ向いてゐるかを見なくてはならない。それが分つたら直ちに出来るだけ早くその希望の達せられ相な位置に置いてやらねばならぬ。さうすればたとい迷ふ様なことがあつても直ちにその誤謬に氣もつくし若し自分に適するものに出會つた時には愈々熱心に固くそれを執り愈々本氣でそれに倣ふことになる」(L. VI)。「一つの力は他の力を支配することが出来る。けれども如何なる力も他を教育することは出来ない。それを完成する力は唯各自の素質のうちに内在する。」このことは又『ヘルマンとドロテア』(タリーアの卷)には、「自分の子供でも親の思ひ通りにすることは出来ません。神様から授かつたまふに我が子として可愛がり出来るだけよく仕込んでやり、そしてめいめい思ひのままに伸びさせてやる様にしたければなりません。人はそれぞれ違つた生れつきをもつてゐますが、それが役に立ちめいめい自分流儀でやつて始めて行くもなり仕合せにもなるのです」と云ひ表はされてゐる。その様に教育は素質の内からの發展の助

成である。自然の活動欲を拘束することではなくて性向、素質の向ふところを認識してそれを自由に發動せしむる様にすることとでなければならぬ。

然し同時に屢々これと矛盾する教育觀として指摘せられる様に、同じく「徒弟時代」にナターリエの言葉として、自然の欲求のままに放任することがではなくて法則への服従に導くことが教育の任務と考へられてゐる。「生活に據り所を與へる法則を表明して子供達にそれを叩き込んで置くことが必要の様に思はれる……人間を見てみると、私にはその本性の中にはいつても何處かに缺陷がある。それを充たすことの出来るものはきつぱり表明された法則だけである」(L. VIII-3, 509)。

『遍歴時代』に於いても個性の發展には出来るだけの自由が與へられるのみならず援助が與へられる。衣服に於いてさへ——「親和力」に於ける原則とは反對に——自己の特殊性を蔽ひ隠すには及ばない。個性を知るために生徒は綿密な觀察を受ける。そして、決定的な職業傾向が発見されると生徒はそれに應じて教育を受ける。然し職業の選擇は性向に従ふのであるが、選んだ職業への教育の場合には嚴重な法則に従はねばならない。即ち子弟の素質と性向とは仕事の選擇、將來の職業の決定に際して十分に顧慮されるが然し一旦選擇が終れば子弟は選んだ仕事の本質から生ずる入念な指導、嚴格な法則に従はねばならないのである。然しかゝる制限は決して強制ではない。何故ならばそれは單なる外からの制限でもなく、教育者の恣意に基づくものでもないからである。個人的衝動の恣意のみを制限し、個性の發展の方向の自由を制限するのではない。むしろこれがうまく發展し活動する可能性を與へるところの即物的必然性が重んぜられる。即物性と客観性とがゲーテの要求するところであるからである。シユタイン夫人の令息フリッツを教育するに當つてのゲーテの主たる目的は(彼がシラーに告白したところに據れば)この少年を「全く客観的に」育てることであつた。

ゲーテは音楽を例にとつて彼の教育を説明する。「絃をやけにひつき廻したり甚しきは自分の好みと氣儘によつて音程をさへ自分勝手につくり出す様なことを音楽家がその子弟に許して置くであらうか。この場合、何ものも學習者の氣儘に任せではいけないといふことが自立つて来る。彼がその中に身を置いて仕事をしなければならぬ資料は紛らふ方なく與へられてゐる。彼が手にすべき道具も亦手交されてゐる。彼がそれを使ひこなさなければならぬ使ひ方さへ彼は規定されてゐることを發

見する。指の交替などがそれである。これによつて一指は他指にその處を譲つて自分の後継者に正しい道を準備するのである。かういふ様な法則的な共同作業 *gesetzliche Zusammenwirken* によつてのみ遂には不可能なことが可能にもなつて來るのである。(W. II-8, 262)。——からいふ風は音樂がこの國 (Pfalzgeogische Provinz) の幹部たちから範例とされてゐるのも、既に云つた様に偶然ではない。といふのは音樂こそ實際に雑多なものが人間的、文化的な目的や目標に對して「法則的に共働」することの最も精神的な象徴だからである。……「教育州」を通過する旅行者には、その住民は誰一人として「自力で何かを生み出すのではなくて、恰も眼に見えぬ精神がすべての人々に魂を吹き込み、何か或る唯一の大きな目標に向つて導いて行く」様に見えるのである。その精神とは音樂の精神である。又文化の精神でもあり、「法則的な共働」の精神でもある。これによつてのみ結局「不可能なるもの」即ち藝術品としての國家が可能になるのである。

(I) Walzel: *op. cit.* S. 21-22.

(a) Lehmann: *op. cit.* S. 327-329.

(c) Leser: *op. cit.* S. 501-507.

(r) Bieleschowsky: *op. cit.* S. 561; Rein: *op. cit.* S. 24.

六

眞の専門家はもとより單なる有用な職人の世界を越え、わざが人間を貫き労働に魂を入れてこれを藝術家に高めるところに成立するのであるにはしても、専門家が労働の共同體の成員として眞に社會に於いて役立ち有用になるためには社會人としての仕上げ、教養が存しなければならぬ。例へば各種の職業相互の間に存する有機的聯關の認識、市民としての必要な知識、技能、態度の啓培を缺くことが出來ないが、それは特定の職業を通しての掘り下げからのみは得られない。深く掘ることはより廣い關聯に到達する一つのみちであるにはしても、それは遂に特殊を中心とする統一であつて況んや専門の職業に吸ひ込まれないで却つてそれを高所から眺めることの出來る特殊を越えた高い立場の如きは望み得られないであらう。そこに専門的職業の堪能を養ふことからのみは得られない一般教養の領域がある。既に引用した様に「人間が何に手を出し何を取扱はうとも個人だけでは十分ではない。社會即ち同輩關係こそ人

間にとつていつでも最上の欲求である。有用な人間はすべて恰も建築主が建築家を、建築家が左官と大工とを求め様な相互關係を保たなければならぬ」(W. III-9, 366)。而もその様な相互關係を可能ならしめるものは個人の限界の自覺と各人が高き意味に於ける専門家として「有用な人間」になることでなければならぬ。然しその反面にその様な勞働の同輩關係を内から支へ、勞働の共同體の成員としての内的交通を可能ならしめる共通な教養を各人がもつことが必要とされる。専門的職業人を人間に高める高次の一般教養はこの様に職業をもつた社會人としての教養の面をもたなければならぬ。それ故に「教育州」の教育に於いてはすべての成員の自由な交際[※]によつて自己中心の狭い經驗の補充・擴大が配慮せられると共に自分の専門的職業以外の技能が教へられることによつてひろがり[※]に於ける制限が補はれる。そして音樂[※]がまたこゝに重要な役割を荷ふ。

* 「故に會談は楽しいのみならず、又極めて有益であつた——それは友達同志がこれまでの學習や實行の經驗を話し合つてみると其處から一つの教養が出来上つてゐて、それが彼等を啓る啓るに驚かし、お互に改めて對手を又學び知らなければならぬと思はせる程であつたからである。」(W. III-3)

* * 「私共のところでは唱歌が教養の第一段階で、他のものは一切之に附隨し、これによつて媒介されるのです。」「私共は考へ得べきあらゆるものゝ中で音樂をはこゝの教養の土臺として運んだのです。音樂からあらゆる方面への滑かな道が通じてゐるのですから。」(W. II-1)

然し既に述べた所によつて明かな如く、人間をして人間たらしむる人格の全體性は全面性への、客體の世界への横のひろがり[※]に於いて確保せられるのではなくて、「人間の重要なる面」の完成に向つての主體内部への、深さへの沈潜に於いて確保せられるのでなければならぬ。「多面的教養」が教養の本質にふれないと同じ意味に於いて「一面的なるもの」der Einselrige は若しそれが單に客體の世界への横のひろがり[※]の局限を意味するものであるならば、何等また教養に於ける本質的なものゝ缺如を意味しないのである。専門的になつた職業人の人間的なるものへの解

放といふ意味に於ける高次の一般教養は従つて「人格の全體性」の確保であつて、横へのひろがりには於いて局限せられたものを何等かまたひろがりには於いて補ふ事であるのではない。かくて最高の人間的完成はこゝには達せられない。

「生まれのよい健全な子供たちは多くのものを身にもつて來ます。自然はあらゆる人に彼が一生に必要な一切のものを與へました。これを發展させるのが我々の義務であります。それは往々ひとりてに一層よく發展します。然し一つのものには誰もそれをもつて世界に生まれて來るものがありません。而も人間がその全側面に於いて一人の人間であるためには一切のことが凡てこの點に懸つてゐるのであります」(W. H. T. 175)。その一つのもの「畏敬」こそ人間を「全側面に於いて」一人の人間に高めるものなのである。畏敬は人格の最深の機能であり、畏敬の心に培ふことが人格を形成する教育の根本的なみちである。局限によつて廣さの面で失はれたもの、斷念せられた部分を再びその局限を解除して多面性へ教養をのばしかへすことが職業人を一人の人間として完成することではない。人間をしてその全側面に於いて nach allen Seiten 人間たらしむるものは、教養を横への平面的な廣がりには於いて全面的 allseitig にし多面的にすることではなくて、「外面的な廣がりには於いて失つたものを深さの次元に於いて補ふ」ことではなげばならない。宗教の核心としての畏敬は「普遍人間的」でありこの普遍人間的な能力の育成によつて人間の全體性が職業陶冶のもち易い偏りからまもられるのである。

かくて求められるべき一般教養の一般性は、一つの對象から他の對象へと移つて行くことではなく、またすべての對象に少しづつ(結局はゲーテの否定する「中途半端」に)向ふことではなくて、レーマンの所謂「人間の重要なる面」の中核である畏敬の情といふ宗教的意識の共通な深みに於いて「人格の全體性」を回復するところに成立するのでなければならぬ。多面的な活動欲から職業への集中は自己制限の犠牲を要求する。然し生の全體性に關して云へば廣さの次元に於ける制限は深さの次元に於いて補はれる。そしてこゝに宗教が深さの次元に導く意義をもつものとして教育の究極の原理となるのである。レーザーはこれをカントに於ける實踐理性の優位に對して宗教的理性の優位と述

べてゐる。

「教育州」に於いては三つの畏敬が教へられる。第一は吾々の上なるものに對する畏敬であり、第二は吾々の下なるものに對する畏敬であり、第三は吾々と等しきものに對する畏敬である。そしてこれ等の三つの畏敬が相合して眞の宗教が生まれ、この三つの畏敬から最高の畏敬即ち自己自身に對する畏敬が生ずる。そして前三者はこの自己自身に對する畏敬から再び發展して行く。この様にして人間は彼が到達し得る最高のものに達し、彼自身を神と自然とが産出せる最善のものと見なすことを許され、實に自慙と我執によつて再び卑俗に引貶されることなしに、この高みの上に立ちつづけるとさへ出来るのである。この様な「眞の宗教」に至らしめることが人間をその全側面に於いて人間たらしめる一般教養の究極目標であつたのである。宗教は最高の *Humanität* であり、かくてゲーテにあつては「職業陶冶は *Humanität* を除外しないのみか、却つて職業陶冶を究極に於いて可能ならしめる唯一の心情(宗教的)はまた *Humanität* の完成を將來する」(1)ゲーテの教育社會の特質はこの點にあるのであつて、そこにプラトンや汎愛派の基礎に立つ社會教育學との區別が存するのである。勿論それ等のものとも類似點はあるが、然し汎愛派の如く單なる功利的なもの、自然的なものに固着せず、又プラトンの如く個人を純粹法則の全能の前に消滅せしめもしない。そこでは「新しい技術的時代の必然性と精神の神的感情との結びつき」が求められる。

宗教の核心としての畏敬はそれ故に同時に普遍人間的であり *Humanität* の制約である。それはすべての人間に共通な存在の基礎にかゝはるものであり従つて根源的に他なるものがその中で結びつくことの出来るものである。それはゲーテの所謂世界敬虔 *Weltkömmigkeit* の正しい根本感情である。ビルンショウスキーはこれを「見えざる教會」と云つてゐる。「各人は自分が生活する大小の共同體を單なる政治的及び經濟的團體としてに止まらず倫理的共同體として觀察し」建設しなければならぬ(2)。勞働の同業關係、相互關係は單に外面的な相互補充の關係ではなくて客觀的な意義をもつ仕事への共同として内面的な連帶性に支へられたものでなければならぬ。勞働の共同體を倫理的共

同體に高める内面的紐帶は畏敬の心である。「畏敬の心こそ勞働の共同體の魂である。」自己に對する畏敬の念は自己の中にある神性に對する畏敬の念である。人間は神性を自己の中に求めなければならぬ。それを自己の中に見出すものは他の各人の中にもそれを見出すのである。これによつて自己自身を神聖にし自己自身が畏敬の對象となる如く、他人も亦神聖になり畏敬の對象となる。各人の個性に應じて爲し遂げられる仕事をめぐつて勞働の共同體が成立するのであるが、かゝる勞働の同輩關係を内面的に生かし支へる最も重要なものは宗教的畏敬の念でなければならぬ。勞働の同輩關係は相互の依存關係や利害の共同を含みはするが、それは單に社會形成の外面的な原理にとどまり、勞働の共同體の内面的理念的な統一の原理ではない。そこに支配するものは利己主義である。分業の反面である連帶性を眞に生かすものは單なる利害の共同ではなくて、かゝる自他のうちに見出す神性への畏敬でなければならぬ。かゝる「敬虔にして純粹なる人、最高の意味に於いて社會的同胞的なる人間」の内面的な結合としての勞働の同輩關係にして始めて倫理的な勞働の共同體であり、そこに於いてのみ有用性は客觀的な意義をもち社會への役立ちが眞に人間を全き教養へ導き得るのである。

* 個人主義的社會に於いては社會生活は個人の私的生活を保護するに止まるのであるから、個體はその人格の本質的部分に於いては社會生活の外にあり、また超個人主義的社會は個人の所有及び存在そのものをまで要求するが、然し個性の價値をその單調な實力的目的のために利用することは出来ない。ところが「勞働の共同體」は個人の全多様性を覺醒し利用する。即ち各人の能力をそれぞれの位置に於いて覺醒し利用する。そして個性をそれぞれの獨自性の充實に於いてとり容れ、個性を規定すると共に個性から規定される。従つて個性は共同體によつて束縛せられるものではなく却つて共同體によつて覺醒せられ解放せられる。即ち共同體は個性にとつては何等自由の制限とは感ぜられない。個は全體の單に部分的な機關として全體に隸屬するものではなくて、自己の獨自性に集中することによつて眞髓を生かす個性と、個の天分をのばすことによつて生きてゐる社會とが相互に生かし合ふその様な結合の仕方こそ、にゲイテは暗示してゐるのである

** 勿論その様な倫理的共同體としての勞働の同輩關係が成立し得るためには勞働の教育と心情の教育とが別々に或は附加的

に行はれるのではなくて、勞働そのもの、仕方について共働的な行動が訓練せられる様に計劃し實施せられるのでなければならぬ。云ふまでもなからう。

- (1) Frischeisen-Köhler: op. cit. S. 148. (2) Bielschowsky: op. cit. S. 557, 567.
 (3) Radbruch: op. cit. S. 160. (4) Bielschowsky: op. cit. S. 568.

4

ところで遍歴能力、遍歴資格の第二條件は内的固定性であつた。職業的機能が單に有用なる器械たるに止まる世界を越えて職業人を一人の自由なる人間にするものはこの遍歴能力、遍歴資格の第二條件たる内的固定性をなければならぬ。職業人を人間として形成する一般教養は従つてこの内的固定性、動の中にあつて不動な内なる一貫の生活根據の啓培でなければならぬ。然るに世態の變遷、生活境遇の變化、運命の變轉に徴動だもせぬ内的精神的固定性にかかる意味の自己畏敬、眞の宗教に於いて得られるのであり、これによつて始めて云はゞ隨處に主となることが出来るのである。倫理的な勞働の共同體を究極の理想として目指しつゝ、而も現實のこの變轉極まりなき變動期の社會生活を切り抜けて行く『遍歴時代』の新しい人間はこの様な遍歴能力、遍歴資格をもつた人間でなければならぬ。

ではキルヘルムの成業、マイスターの境涯は何をを目指すのであるか。キルヘルム・マイスターの『遍歴時代』が『徒弟時代』に對するものであることは云ふまでもない。「レールリング・ゲゼーレ・マイスター」の三段の階級をもつたドイツの手工業職人組合を念頭に置いて書かれたところの、キルヘルムが云はゞ人生の「徒弟」時代を卒へて「マイスター」の境涯に到達するための「遍歴」の時代である。そしてそこに目指されてゐる人間が遍歴能力をもつ人間であるとするならば、遍歴能力をもつ人間は遍歴時代を卒つて自らはもはや遍歴しない別な人間になるのであるか。徒弟時代の年季あけの卒業免狀をもらふことは人間が既に己の天職を自覺してその道の機能を身につけたものであることが認められることを元來意味するのであつた(L. VIII-5, 520-530)。即ち遍歴能力をもつといふ資格を認められ

たのである。そこで彼は遍歴を通してその能力を訓練し、益々正しい意味での遍歴能力をもつ人間に自らを形成するのである。とすればおよそゲーテに於いて成業即ちマイスターの境涯は遍歴に徹することで行なければならぬ。遍歴者が遍歴者であることをやめるのではない。徹底せる自覺的な遍歴者となることで行なければならぬ。地理的空間的な遍歴はやめてもそこに練られた人生の遍歴者たる資格能力は益々深められなければならない。マイスターとは遍歴を終つてもはや遍歴を要しない、或はしない人間ではなくて、眞に遍歴し得る人、遍歴を通して益々 wanderlings になり、遍歴能力を高めた人でなければならぬ。『徒弟時代』『遍歴時代』につづいて『マイスターの時代』が現に存在しないといふことが一つの象徴として考へられてもよい様に、マイスターは遍歴時代の遍歴者を離れてはあり得ないのである。眞に遍歴能力のあること、それがゲーテの教養の眞の意義であり、その様に形成せられた人間は一定の職業に堪能でありつゝその有用性に眞に客觀的な意義を附與する全面的に形成せられた人間——有用なる人格——なのである。

既に述べた様に『遍歴時代』は人生とは如何なるものであるかといふことゝ人生を如何にすべきかといふ問題をめぐつて展開するのであつて、而も單に人生が如何なるものであるかを示すのではなく人生が如何なるものであるかに即して人生を如何にすべきかが主要問題を形成してゐるのである。種々な相をもつ一つの人生を自ら遍歴する人間は遍歴能力をもたなければならぬ。人生を遍歴することの出来る人間、それが『遍歴時代』の示さうとした「價値ある人間の新しい型を育成する方向」であつた。「自分の居るどんな境遇にも處し得ず、どんな境遇にも満足を與へないといふ風な困つた性格」、これがゲーテの最も厭はしく思つた性格である。固定した状態といふ様なものは實在しない。固定した状態への單なる編入を超え、亡びゆく古き世界への郷愁を捨て、人間は今や變り行く世界に適應しなければならぬ。遍歴能力をもたなければならぬ。單に世態の變轉に奔浪されるのではなく、又單に己れを固く閉ざして頑な自己の固定性の故に變轉極まりなき社會の變化に適應し得ず生活能力をもち得ない人間でもなくて、到

るところに自活することが出来て自己を維持することが出来、社會の變轉にも拘らず有用に適應し得る人間でなければならぬ。而も一貫を己れ自らの内にもつて隨處に主たる人間でなければならぬ、と考へる。過渡期の艱難や危機の中に新しい世界へ至る道、内外の新しい秩序を築く道を見出すことを運命としてゐる吾々にとつて『遍歴時代』の人間類型は一つの生き方と教養の類型とを示してゐる。

然し遍歴能力をもつ人間にとつて變化そのものは單に外から與へられたものである。如何に一貫を内にもつて隨處に主たるものと雖も單に世態の變轉に應じて遍歴し得るのみでは主體性は單に內的觀念的なものに止まる。例へばデュイイが「人生の事情は絶えず變化しつつある。従つて兒童を人生に於ける固定不變の状態のために教育することは絶対に不可能である。」それ故に兒童の自主性に培ひ不斷の變化によく「適應」し得るのみならず、「この變化を形づくり指導する力、方向づける力をもち得る様に」教育しなければならぬと云つてゐるのがその一面の例である様に、人間は單に遍歴能力をもつのではなくて、變化を方向づける能力をもつてなければならぬ。人生を遍歴し得るに止まらず人生を改革し得るのでなければならぬ。變化を主體の行爲とは離れた單なる運命として『あきらめる人』(Die Entsetzten)ではなくて變化を形づくり指導する人でなければならぬ。自然及び社會の法則の十全なる意識的利用によつて變化そのものが人間の自主的な合理的企劃の下に入り、人間が變化の奴隸ではなくて變化の主となり得るのでなければならぬ。こゝに『遍歴時代』の人間類型、教養の類型の一つの限界がある。

然しそれにしても「現代に對するゲーテの使命」(シュワイツァー)は決して小さくはならない。勿論個人と社會は單に職業によつて媒介せらるゝに止まるものではなく、又一般教養は廣さに於ける制限を深さに於いて補ふといふだけでは勿論足りない。然し倫理的共同體としての勞働の共同體の確立とそれにふさはしき市民の教育といふゲーテの社會教育的理念は、その限界にも拘らず、その限界を補ふ多くのものをもつてゐる現代にとつて却つて少なからぬ意義を有すると思はれる。(一九四九年十一月五日 京都哲學會講演)